辞 書 と 文 体

菊 池 繁 夫

Approaching Style through a Dictionary

Shigeo KIKUCHI

大阪国際女子大学紀要25号－2（1999）抜刷

The Bulletin of Osaka International University for Women No. 25－2 (1999)

Osaka International University for Women
Osaka International College for Women
21-57, 6-chome, Todacho, Moriguchi-shi, Osaka, Japan

辞書と文体

菊池繁夫

Approaching Style through a Dictionary

Shigeo KIKUCHI

文学的であれ非文学的であれ、テクストを文体的に読んで行く場合、我々は時に辞書にその説明を求めることがある。この文体という概念を、Svartvik and Quirk (1980) の分類に準拠して変異としてまとめ直し、その種類別に検討をし、文体研究を行う際に、辞書がどの程度語義等に関してカバーができるものか見てみたい。なお、ここでの辞書とは、英語学、英米文学および言語学などの授業での使用に耐えうる、一般の携帯用辞書を念頭に置いている。

キーワード
stylistics　dictionary　discourse　message form　message context

1. 2つの文体の定義：**message form** と **message context**

文体の定義に関しては、多くの形があるが、Katie Wales, *A Dictionary of Stylistics* (Longman, 1989) に従うと以下の5つになる。これをもとに大きく2つにまとめ直し、そのうちの1つについて、それを辞書との関連において見てみたい：

(1) MANNER OF EXPRESSION の観点からの文体で、writing や speaking で用いられる：ornate style や comic style ; good style や bad style など

(2) SITUATION、或いは (a) REGISTER の観点からみた文体：特定の非文学的シチュエーションに共通の体系的バリエーションで、例えば、advertising、legal language、sports commentary ; 或いは、(b) MEDIUM ; または (c) GENRE とか PERIOD による文体：euphuisticstyle、style of Augustan poetry

(3) A SET OF LINGUISTIC FEATURES としての文体で、テクストレベルでその特徴の現れたもの：style of Keats's *Ode to a Nightingale*、style of Jane Austen's *Emma* ; そして、著者の言語的特徴：Miltonic style、Johnsonese

(4) CHOICE の観点からの文体：

(i) Pater passed away last summer

(ii) My Dad kicked the bucket last summer

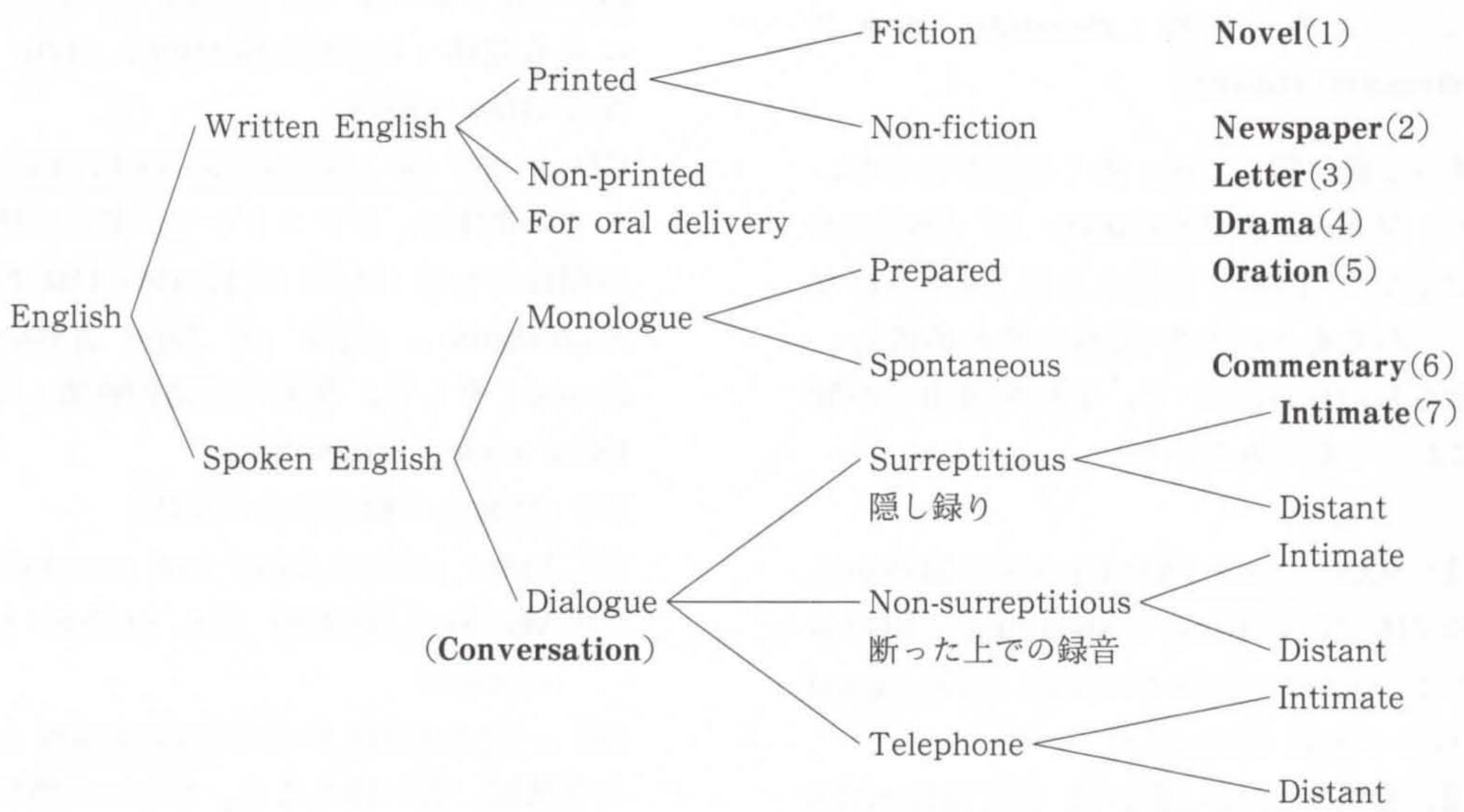
(5) 一定の norm からの DEVIATION と見る文体観。言い換えると、ひとつの時代、ひとつの言語全体の common core に対して見た場合のテクストとか、言語。テクストが異なれば、そこに異なる dominant な或いは前景化された特徴が現れると見て、

それがHopkins、Dylan Thomas、e.e. cummingsに見られるような詩的idiolectを形成するとする

Jakobson（1960）とHymes（1968）によるコミュニケーションのmacro-fuctionsの枠組みで見ると、Katie Walesの5つの文体の分類は、大きく2つの形にまとめ直すことができると思われる。1つは、文体をmessage formという言語そのものに基づいて記述しようとする観点。もう1つは、message formを取り巻くmessage context（例えばchannelやcontext、あるいは、participantsなど）に基準を求める観点、の2つである。5つの文体分類のうち、（3）は前者にあたり、（2）は後者にあたる。（3）は言語的特徴そのものであり、（2）については、（a）REGISTERは分野としてのcontextの問題、（b）MEDIUMはchannelの問題、（c）GENREはやはり分野としてのcontextの問題であり、PERIODは時代という時間的contextの問題といえよう。（1）は、具体的な言語事実に拠るものなので（3）の一種であり、（4）は、どういう語句を選ぶかということでやはり（3）の一種といえよう。（5）も（3）の一種といえようか。そうすると、大まかではあるが、文体の種類はmessage contextに基づく（2）とmessage formに基づく（3）にまとめられると思われる。

2. **Corpus**との関連から見た（2）の文体上の分類

伝統的な（3）の分析法も多いが、イギリスでも共時的な文体論の流れは、corpus-basedな英語の研究方法の影響で、（2）の形で文体分析を行う場合が多い。代表的なSvartvik and Quirk（1980）に従って、message formを取り巻くmessage context、つまり特定の言語的特徴が現れる器である言語環境を7つに分けてみる：



（J. Svartvik and R.Quirk ed., *A Corpus of English Conversation*, CWK Gleerup Lund, 1980, 12-13を基に作成）

さて、この図の形に分類された文体をひとつひとつ辞書との関連で見ていくことにする。

次の（1）は James Joyce, *Ulysses* からの一節であるが、その中の 'hungry' に注目してみたい。この語の、この context における用法は、辞書から読みとれる、あるいは辞書に記載できるのであろうか：

> **(1)** (Leopold Bloom) 'Chump chop from the grill. Bolting to get it over. Sad booser's eyes. Bitten off more than he can chew. Am I like that? See ourselves as others see us. *Hungry* man is an *angry* man. Working tooth and jaw. Don't! O! A bone!' (Joyce, *Ulysses*, 169)（イタリクスは筆者）

> '... the digestive process is a form of decomposition, and in one sense *Ulysses* is a stomach or tomb in which language breaks down into its constituent units— ... mimesis as the isomorphism between two decompositional series, one involving language and the other the body'. (Henry Staten, 'The Decomposing Form of Joyce's *Ulysses*', *PMLA* Vol. 112, No. 3, 1997, 380-392)

Staten（1997）によると *Ulysses* は 'language' と 'body' の 'decomposition' が描かれた作品である。その意味では、この 'Hungry man is an angry man' は、その両面が出た箇所であり、特にその中でも 'hungry' は key word といえるのではあるまいか。まず、'hungry' は食べる行為としての digestion/decomposition を表す語であり、また、'angry' と韻を踏むことで、言語としての decomposition が進む。つまり Jakobson（1960）と Hymes（1968）のいう poetic function が全面に出て、message の伝達という、言語コミュニケーションでは中心的な役割をする referential な function が後退する。

この 'hungry' の様な語の *Ulysses* の中での働きは、果たして辞書に記載するに足るのであろうか。例えば、'hungry' と 'angry' の共通の schema の様なものが考えられるであろうか。この *Ulysses* では Leopold Bloom は、腹の減った男の食べ方はまるで怒った人のようだと感じており、その点では、その振る舞い方の点で両者は共通のものを持つといえる。ただその意味の類似性は、語に内在的に存在する安定した schema 構造ではなく、hungry—angry の踏韻が先行し、それにひっぱられる形で意味の類似性が生じている、いわば不安定な類似性によるものといえよう。その意味では、辞書への記述の妥当性が問われる語である。

同じ文学テクストからの語であっても、次の 'haggadah' や 'hair' のような語は、*OED Supplement* に記載されていることからも分かる通り、とりあえず辞書にスペースがあれば記載されてよい語と思われる：

> Cf. 1 **haggadah**. Add: **2**. The Jewish ritual for the first two nights of the Passover. Also the book containing the text of the service.
> ... **1922** JOYCE *Ulysses 708* An ancient hagadah book.
> Cf. 2 hair. *sb.* Add: **8**.... **s**. *to lose one's hair* (or *to get one's hair off*): to lose one's temper.
> c **1920** D. H. LAWRENCE *Phoenix II* (1968) 120 'Nay—nay,' said Lewis testily. 'Don't get your hair off, Mrs. Goddard.' (*OED Supplement* Volume II H-N)

次の（2）の 'after' はどうであろうか。果

たして辞書での説明が可能な文体特徴であろうか。表記の文体論の学会で、元Nottingham大学教授のWalter Nashが、tabloid版新聞の一つの特徴として取り上げたものである。ここでは、原因—結果を表す前置詞の代わりに時間の系列を表す前置詞afterが用いられている：

(2) 'A young tennis star has been zapped *after* developing "Nintendo elbow" from playing too many computer games'. (Walter Nash, 'Tabloid rhetoric: or, sentences that say it all', The 17th Conference of the Poetics and Linguistics Association, Nottingham, 1997)（イタリクスは筆者）

この前置詞はスペースが許せば掲載可能な語である。

次の（3）は、筆者がロンドンの某ホテルに送った手紙の返事である。筆者の名前に(Mr）と書いて性別を明示しなかったために、'Ms'とされている。他にも、'Mrs'とされたことがあるが'Miss'はまだない。これは、ビジネスレターの慣用法であろうが、性別不明の場合は、MsやMrsを用いて、Mrとはしないというのは、男性に女性のMsやMrsを用いても、その逆よりは失礼にならないということであろう。この用法も、単にスペースの問題で、それが許せば掲載可能といえよう：

(3) 13.9.97
Dear *Ms*. Kikuchi,
Many thanks for your letter. Yes, indeed we had made an error in charging your credit card by £220.00 ....（イタリクスは筆者）

（4）は、Dramaの言語で、Mick Shortは自然な会話で見られる'normal non-fluency'はdrama dialogueでは生じないと説明している（'... everything is meant by the playwright'. (Short 1996, 178)）。この引用中の'er'はChapuysが、自分が言い訳をしなければならない、その'discomfort'を示すように作家によって意図されている。通常のdialogueである（7）での'er'はnormal non-fluencyを示すといえるので、この種の'er'にはmeaninglessなものとmeaningfulなものの区別があることになるが、これもスペースに余地があれば記載可能といえよう：

(4) Norfolk: One moment, Roper, I'll do this! Thomas — (*Sees CHAPUYS*) Oh. (*He stares at CHAPUYS, hostile*)
Chapuys: I was on the point of leaving, your Grace. Just a personal call. I have been trying . . . *er* to borrow a book — but without success — you're sure you've no copy, my lord?
(Robert Bolt, *A Man for All Seasons*, Act II, from Mick Short, *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*, Longman, 1996, 177)（*er*のイタリクスは筆者）

（5）の下線部は演説のことばであるが、これもやはり、辞書のスペースに余裕があれば記載してもよい表現である。ここでは、奥田氏は、「話す」大統領と「話しかけられる」国民とのレトリック的同一化が達成されていて、「われわれアメリカ人」という一体感が創り出される、とした：

(5) F. D. Roosevelt: 'I am certain that

my fellow Americans expect that on my induction into the Presidency I will address them witha candor and a decision which the present situation of our Nation impels'. ('First Inaugural Address of Franklin D. Roosevelt, March 4, 1933', *Inaugural Addresses of the Presidents of the United States 1784-1989*, United States Government Printing Office, 1989. 奥田博子「F.D. ローズヴェルト大統領第一次就任演説における「呼びかけ」のレトリック」第16回日本記号学会、1996）（イタリクスは筆者）

（6）では眼前の出来事の記述、つまりIMMEDIACYと名付けることのできる状況では、'across'の前の動詞が省略されたり、'moves'のように動詞が現在形で用いられたりする。これは、主に実況中継のような状況であるもので、いくつかのそういった状況で使用頻度の高い語（例えば、moveなど）に具体例を付けるのは可能であろう。これもやはりスペースの問題であると思われる。ちなみに、DISTANCEは翌日の新聞でのCommentaryの文体である：

(6) (Spoken commentary) 'Here we go. Ali quickly *across* the round [sic] Round one Ali bouncing around shifting left to right George *moves* slow....'

IMMEDIACY

cf. (Written commentary) 'The bell! Through a long unheard sigh of collective release, Ali *charged across* the ring. He looked as big and determined as Foreman, so he held himself, as if he possessed the true threat.

DISTANCE

(Rebecca Hughes, *English in Speech and Writing*, Routledge, 1996, 103-104)（イタリクスは筆者）

（7）は、自然な状況でのdialogueの例であるが、このような統語的に不完全な特徴も、この種の文体では自然であり、スペースがゆるせばその旨記載可能である：

(7) 1<S01> Are you still playing er
2<S02> └ Gui-tar
3<S01> Irish music, yeah
4<S02> No I don't play very much now, no, not at all

(R.Carter and M.McCarthy, *Exploring Spoken English*, Cambridge, 1997, 42)

結　論

以上、Wales（1989）で行われた文体へのアプローチの仕方のうち、message formを取り巻くmessage contextに基づいた分類である（2）をもとに、7種類の文体変異を論じて来た。辞書への記載という点では、上記Svartvik and Quirk（1980）の定義によるFictionとしての変異 —— 分類の（1）にあたるliterary discourseの文体 —— は、辞書への記載が難しいのであるが、かなりの程度専門家の間で合意のあるものは、やはり記載しておくべきと思われる。確かにFictionとしての文体は意味変化の振幅が大きく、辞書でカバーするには問題が多い。これはスペースの問題ではなく、典型例で辞書に記載を行っても、それをもとに新たなテクストへの応用がなかなか難しいためである。ただ、通常の慣用的な表現ほど社会的定着はなくとも、重要な作家のkey wordにあたるようなものは載せておくべきであろう。辞書は、社会的慣用的な用法の説明で止まるべきではなく、かなりの程度合意のあるもの、という限定つきではあるが、更にspecificな個人の文体まで迫ってもよいのではあるまい

か。個人的文体は、一般化がむつかしくとも語の用法の1つのあり方であり、それもことばの重要な面だからである。特に、文学テクストを読むことの多い英語学英文学科では、この種の、定着したものではあるがdelicacyの高いlexicalな情報を記載した辞書は、「読みの深さ」の指導という面からも有用と思われる。

註：本稿は、1997年12月13日（土）に京都外国語大学で行われた「ワークショップ　英語の辞書」（主催：JACET英語辞書研究会）において「辞書は文体に迫れるか」と題して発表したものに加筆したものである。

References

Burchfield, R. W. (ed.) (1976) *A Supplement to the Oxford English Dictionary*, Vol. II, H-N, The Clarendon Press, Oxford.

Carter, R. and M. McCarthy (1997) *Exploring Spoken English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Hughes, R. (1996) *English in Speech and Writing*, Routledge, London.

Hymes, D. (1968) 'The Ethnography of Speaking', in J. A. Fishman, ed., *Readings in the Sociology of Language*, Mouton, The Hague.

Jakobson, R. (1960) 'Poetics and Linguistics', in T.A. Sebeok, ed., *Style in Language*, MIT Press, Cambridge.

Joyce, J. (1992 [1934]) *Ulysses*, The Modern Library, New York.

Nash, W. (1997) 'Tabloid rhetoric: or, sentences that say it all', a lecture at The 17th Conference of the Poetics and Linguistics Association, Nottingham Trent University.

奥田博子（1996）「F.D.ローズヴェルト大統領第一次就任演説における『呼びかけ』のレトリック」第16回日本記号学会大会、東京大学.

Short, M. (1996) *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*, Longman, London.

Staten, H. (1997) 'Decomposing Form of Joyce's Ulysses', *PMLA* 112:3.

Svarkvik, J. and R. Quirk (eds) (1980) *A Corpus of English Conversation*, CWK Gleerup, Lund.

Wales, K. (1989) *A Dictionary of Stylistics*, Longman, London.

所属；菊池　繁夫：大阪国際女子大学　国際コミュニケーション学科

（受理日　平成11年11月26日）